

ニューイングランド・ニュージャパン

奨励	岸 基史 [きし・もとし]
奨励者紹介	同志社大学経済学部准教授
研究テーマ	エコロジー経済学、環境経済学、理論経済学

「先生」とは呼ばないで

ただいまご紹介にあずかりました経済学部の岸と申します。はじめに皆さんにお願いがあります。どうか私を「先生」と呼ばないでください。いきなり余談になりますが、「先生」というのは先に生まれたもの。自然の摂理にしたがえば先に生まれたものは先に死ぬ。皆さんから先生と言われると先に死んでくださいと言われていたような気がしないでもありません。皆さんより先にはくたばらんぞという気持ちをもっています。中国語では先に生まれた人、年上の人は先生で、先生というのは年上の人に対して親しみをこめた敬称で誰々さんという意味あいだそうです。ところが日本において先生といいますと、教員は先生です。政治家も医者も弁護士も先生です。カリスマ美容師、料理研究家の方々も先生です。しまいに学校のなかでも教員同士がお互いに、「やあ先生」「先生こそお先に」とあいさつして、なにか違うんじゃないかという気がしてならないわけです。

そういうことを私が意識したのは同志社で学び、高校、大学、大学院を出てそのまま同志社の教員になったその日のことです。お互い「岸さん」、「誰々さん」と会話をしていた事務の方から、その日を境に「岸先生」と、コロッと呼ばれ方が変わってしまいました。気恥ずかしい、おもはゆいだけではなく、何か違和感がありました。この違和感が何かかわからずいたわけですが、そのうち違和感もなくなり、慣れてきて、ある時ふと、これってまづいんじゃないかなと思ったわけです。私自身弱い人間ですから、先生と呼ばれてあたりまえと思ってしまうのではないかと不安がよびまして、頭を下げて「先生と呼ばないでください」と言ってみるようになったのです。

実はそのころ、同志社でも、かつては教員・職員・学生が互いに「さん」づけで呼んでいたという話を知りました。慶応は形式的かもしれませんが、まだ「君」づけで呼んでいるそうです。同志社ではそれがなくなったという話を聞き、なるほどそうだったのかという感じを受けました。そのことをある職員の方に話し、「先生と呼ばないでくださいね」と言うのと、「それって昔の話じゃないですか。『さん』なんて、けじめがつかないですよ、職員と教員の間、学生との間はけじめをつけないといけない」と言われたのです。昔の話だろうが、今の話だろうが、大事なことは残したいと思います。先生と呼ばば、けじめがついて、「さん」づけはけじめがつかないのでしょうか。そんなものではないだろうと思うのです。その時にゼミの学生が二人ほど通り返して「あ、岸さん」と声をかけてきました。職員の方はその時、黙ってしまわれたのですが。

この余談も実は同志社の根底にかかわる話だと思えます。世間で揉み手をしながら「社長、社長」とペコペコするのと同じような感じで「先生、先生」となってしまう。物事が形式的・表面的になってしまうのは嫌だなと思えます。名前で呼ぶとなると相手の名前を覚えなさいといけません。それって大事なことで、人と人が出会って何か関係をもつ時にその人の名前を覚えることはその人を一人の個人として認めて尊重する第一歩になると思えます。日本の場合は、直接相手の名前を口にするのは失礼だという考えもあるかもしれませんが、しかし互いに名を名乗ることから人間関係が始まるというも昔からあるわけです。私自身、同志社のなかでそうでありたい、少なくとも個人的には先生と呼んでほしくない、そういうふうに思っています。

新島の脱国

さて、今日のタイトルは「ニューイングランド・ニュージャパン」です。タイトルを決めてくれといわれてエイヤツとつけたのですが、これに沿って話をしたいこうと思えます。皆さんは新島襄の名前を知っていて、どういうことをしたかご存じだと思いますが、若干、かいつまんで話しておきます。同志社の創立者である新島襄は一八四三年、上州、群馬県高崎の安中藩の祐筆（書記官のこと）の子ともとして、東京の神田の藩邸で生まれました。彼は父親が祐筆ということで彼自身、書記官になることを期待され教育を受けて育ちました。その新島が十六歳のとき、多感な思春期の時期、漢文のアメリカ合衆国史を手に入れて読みました。アメリカという国では国の大統領、国の代表を選挙で選んでいる。そこでは科学技術が進んでいるということに驚愕しました。日本は封建社会で祐筆の子は祐筆で君主に仕えないといけません。殿様はどんなに優秀な殿様だろうが、バカ殿様だろうが、殿様である。封建社会において統治者は人びとを人間として扱わない社会だった。日本はこの体制を変えていかないといけないという思いをもつようになった。次にオランダの巨大な軍艦を見てまた大変驚きました。日本は鎖国をしている世界から取り残されいざいざ大変なことになる。日本も科学技術を取り入れて、軍事力をもって海外との交易もしていかないといけない、国を開いていかないといけないと考えるようになったわけです。

また漢語訳の聖書を読んで、天なる父のもとに人間はすべて平等だ、この世のすべてのものが天なる父によって創られたのだという考え、万物の創世主である神のもとでは人間はみな平等なのだ、そういう考え方に共鳴していきました。自分は、ぜひそういうところに行ってみたい。窮屈な生活から抜け出したいと国禁を犯して、当時、国を出ることは死罪に値することですが、飛び出して函館から上海に出て、船を乗り換えてアフリカを越えて大西洋周りでアメリカのボストンに入りました。いろんな人の協力を得て、密航したわけです。ボストンに着いたものの、事前の打合せがなかったわけではあります。ボストンに着いて「しばらく待っておけ」と船長に言われて、これからどうなるのだと不安になるわけです。その時に船主である実業家のアルフス・ハーディという人が「何をしにきたのか」とたずねます。彼は説明してボストン海員の家に泊めてもらって、そこで「脱国の理由書」を書いたのです。それを読んだハーディ夫妻が、いたく感銘して、新島襄を自分が理事を務めているフィリップス・アカデミーという学校に通わせるわけです。それ以降、ハーディ夫妻は生涯にわたって、新島襄を精神的にも経済的にも支援しました。アメリカの親、パトロンになったわけです。新島襄は自分の名前のミドルネームにハーディとつけて向こうの家族になりました。

新島はフィリップス・アカデミーの教会で洗礼を受けて、そこを出てからアーモスト大学に進学しました。その後アンドーヴァー神学校を出て都合十年ほどアメリカにいて日本に帰ってきます。三つの学校、アンドーヴァー神学校、アーモスト大学、フィリップス・アカデミーに行ったのは、ハーディがこれらの学校の理事をしていたからです。これらの学校はキリスト教の学校ですが、特に会衆組合派、Congregational、キリスト教のなかでもプロテスタントの一派に属する学校です。会衆組合派にはニューイングランド精神があります。同志社の新島精神というときに出てくる自由、良心、自治自立の原点がここにあると思えます。

ニューイングランドの成立

イギリスにおいて一五三四年、ヘンリー八世がローマ・カトリックから独立してイギリス国教会をつくりました。それまでは教会のトップにローマ法王がいるローマ・カトリックがあったわけですが、そこから独立してイギリスの国王が教会会頭となるイギリス国教会ができました。その後、エリザベス女王の頃、プロテスタントのカルビン派が大陸の方で出てきますが、その影響を受けてイギリスの国王をトップにするのではなく、牧師や長老を教会の指導者にしようとする清教徒、ピューリタンが現れてイギリス国教会から分離することが起こったわけです。ピューリタンは国王の権力から離れて信仰の自由を求めて純粋（ピュア）なキリストの福音に基づく教会をとり戻そうと考えた人たちがです。神の声を直接聞き入れることができる良心を誰もがもっているという考えです。良心をもって神の声を聞く、それこそが神のものと民衆であると。そこに個人の良心を尊ぶ自由市民の自主的な信仰が生まれていきました。ピューリタンのなかから、イギリス国教会から独立分離していこうというグループが出てきた。会衆組合派教会です。清教徒を指導していたケンブリッジ大学が中心となって、ロバート・ブラウンとか、イギリス国王を中心とするところから離れて、純粋に信仰の自由を求めて、自分たちの家で聖書を読み、礼拝をするところから始めて、教会組織として成り立っていきます。やがて会衆組合派の人たちがメイフラワー号に乗ってアメリカ、ボストンの南にたどり着きます。会衆組合派の人たちは、自分たちが良心をもって神の声を聞き、信仰する、国からの信仰の自由をもつ人たちです。

その人たちはプリマスという町を開発しましたが、上陸する前にメイフラワー契約を結びました。船に乗り込んだ人たちのなかには、清教徒以外の人たちもいましたが、お互いに契約を交わします。自分たちが上陸した開拓地で自治公共体をつくって、ともに皆で生きていこう。必要に応じて平等な法律をつくり、ルールをつくり、約束事にしたがってやっていこうと契約を結びます。その後、周辺において開拓が進んでいきますが、その中心になった移民たちが、会衆組合派の人たちだったわけです。

この場所がニューイングランドと呼ばれる場所です。マサチューセッツ州の植民地の中心になって、開拓のための基本的な柱を会衆派教会が体制となる教会とすることを決めたわけです。マサチューセッツ州植民地のガバナーになった人が、ジョン・ウィスロです。その人がキリスト教の慈愛のモデルを書きました。マサチューセッツ共同体をつくり、そのモデルになるもの、ヴィジョンを書いたわけです。正義と愛をもって共同体をつくっていこう。共生していこうという思想がここにあったわけです。その後、開拓民たちで独立してやっていこうという精神で、民衆は良心をもって勤勉に働く。民衆の声は神の声なんだという考え方を強めていきます。そしてついに一七七三年、ボストン茶会事件を起こしてイギリスから独立していく。イギリスとの戦争によって独立していきます。マサチューセッツの州都であるボストンの町にオールドサウス教会があります。当時、オールドサウスミーティングハウスというところに一七七三年、五〇〇人ほどの市民が集まって決起集会を起こしてイギリスからの独立のために動いていきました。今はオールドサウスミーティングハウスがオールドサウス教会になっています。ボストンマラソンはアメリカの独立戦争を記念して行われるマラソンですが、ゴール地点がこの教会の前で、ボストンの心真ん中にあります。先頭走者がゴールする時には教会の鐘が鳴らされます。ベンジャミン・フランクリンやサムエル・アダムスなど、アメリカ独立運動の指導者たちはこの教会から出ています。アルフス・ハーディはこの教会の理事をしていました。

ニューイングランド、新しいイギリスをつくるためには自分たちの指導者を育てないといけない。初代の開拓民の指導者はイギリスから渡ってきた人たちで、多くはケンブリッジ大学の卒業生です。そういう人が中心になって新しい国をつくるときの指導者になりました。ただ次の指導者を育てていかないとはいけません。そこでつくられたのが、ハーバード大学です。ハーバード大学は新しいニューイングランド、新しい国をつくる、その指導者たちを自分たちで育てていこうというなかからできたわけですが、当初、ハーバード大学も会衆組合派のなかにあったわけです。

ボストンは世界に開かれた貿易の町で、リベラルな雰囲気がありました。アメリカが独立したあと、ハーバード大学はもっとリベラルな方に変っていきます。そういうなかで会衆組合派の主流派の人たちは、しっかりとしたよい学校をつくらうとアンドーヴァー神学校、フィリップス・アカデミー、アーモスト大学をつくった。アーモスト大学はマサチューセツ

ツ州の西部開拓のための指導者、牧師を養成するためにつくられたのだそうです。

オールドサウス教会とフィリップス・アカデミー、アーモスト大学、アンドーヴァー神学校は会衆組合派のなかで密接なつながりをもっています。これらの理事を務めていたハーディは牧師になりたかったらしいですが、実業家になりました。敬虔なクリスチャンであったハーディは、貿易から得た多額の利益を教会や社会事業のために寄付していました。ハーディは会衆組合派のミッション、宣教師を世界に派遣する組織、アメリカンボードの理事もしていました。新島襄はその集会、パーモント州ラットランドにあるグレース教会で開催された年次集会に行き、自分は日本に帰ったらキリスト教主義の学校をつくりたいのだと、本来はそういう場ではないにもかかわらず、意を決してそのような演説をして多くの人から寄付をいただいた。それが同志社ができる基金になりました。

近代日本の成立

さて、日本はいつまでも鎖国をして幕藩体制を続けることはできなくなり、明治維新が起こって、新しい国づくりが始まりました。メインになったのは吉田松陰とその門下生たちが中心となった動きで、国家神道を基本に据えながら天皇を中心にした国家をつくらうとする伝統的保守主義です。これがその後保守本流となっていったのですが、しかし、新しい日本をつくり日本の独立を守らうとする動きは他にもありました。たとえば、幸徳秋水や中江兆民といった人たちが無神論、自由民権、人道主義の立場をとりました。また、福沢諭吉や大隈重信などの改革派は儒教精神にある天理、仁義を重んじながら、そういうものは西洋社会にもある、キリスト教にもあるということを理解して、西洋の制度や科学技術を採り入れていこうという人たちでした。福沢は慶応大学をつくり、西洋の科学技術を学び、経済活動の自由を求める方向に進んでいきました。キリスト教・ユニテリアンのリベラルな立場を認めてはいましたが、キリスト教主義というわけではなく、儒教精神を根底においていました。和魂洋才です。また、大隈は政治的自由を求めて、早稲田大学をつくりました。そういう新しい日本をつくるという流れのなかであって、新島襄はキリスト教主義の立場をとりました。日本人が西洋の制度や科学技術をただ学ぶだけではだめだ。その根底にある人びとの倫理を理解しないとイケない。自由の根本にある精神的なものは何であるかをきちんと理解しないと、いくら表面的なものを取り入れてもだめだという考えでした。キリスト教主義に基づく国家をつくりたい。そのためにそういう人々を養成しようとして同志社をつくったのです。その頃、熊本バンドとか札幌バンド、横浜バンドができましたが、そういうことを目指したグループだったわけです。

しかしその後、保守本流、天皇を中心として国家権力をつくる動きが強くなりました。官立大学である東京大学設立の目的は官吏をつくることであり、官僚を養成して指導者にし、天皇を中心に国家を運営していく、あるいは天皇に忠実な臣民を育てていくことでした。さらに国権による富国強兵策がとられました。その後日本は第二次世界大戦で敗戦、天皇は国の象徴と位置付けられ、国家の主権は国民に移りました。私たち一人ひとりが国主権者なのです。形態的には議会制民主主義国家となりました。

今の日本ではすべての市民に基本的人権が認められ、皆が平等な権利を有します。一人ひとりが自由に自分の意見を述べ、意志を表明することができるようになりました。これは他者の意見を尊重するということでもあります。しかし、本当にそのことを自覚して行動しているのか、私たちが主権者としての責任を負っていることを自覚しているのか、疑問に思うことが多あります。主権者である日本国民はもっと意識を変えて、ニュージャパンを作っていくかならないと思います。

たとえば選挙における投票率の低さ、特に若い人の投票率が非常に低いことは大きな問題だと思っています。主権者である私たち一人ひとりがこの国をどうしていきたいのか、どうしていくのかを考え意思を表明して決める。これが選挙です。しかし、社会に対して無関心であったり、選挙で投票に行くのが面倒くさいとか、投票に行くよりも遊びに行く方がよいなどというのは、主権者として無責任であると思います。さらに、たとえすべての有権者が投票し、投票率が100パーセントになったとしても、民主主義にはいろいろと問題があります。その一つが、社会にたくさんいる人たちが強くなり、少数派はどうしても社会的弱者になってしまうという問題です。今、日本では高齢化が進んでいます。中高年、団塊の人たちの数が圧倒的に多く、皆さんの意見は選挙ではかなり通りにくくなります。政治だけではありません。たとえば企業が提供する製品やサービスにしても、たくさんいる人々を相手にしようとする。少子高齢化が進むなかで、皆さんは社会的に割を食う立場にあり、社会的弱者になる傾向が強まっているわけです。世の中、社会に対して意思表示せず。選挙にも無関心で良いのでしょうか。これは皆さん自身にとっての問題なのです。皆さんはそれでよいのですか？

とにかく、行動しよう

是非とも自分たちが住んでいる社会のこと、世界のこと、地球環境のこと、人類が直面しているいろんな問題に目を向けてほしい。そのような問題を考えてほしい。考えるだけでなく決断を下して、どんなことでもいから行動してほしい。新島襄は多感な頃、いろんなものに触れて、これじゃいかん、こんなことでは日本はだめになると新しい自由を求めて飛び出していった。彼自身、いろんなことを考えた上で決断をし、実行に移した。若さのいたりだったかもしれませんが、それが若者の特権です。それ以降、彼はいろんな困難のなかで自分の信念をもって向かって進んでいく。そういう人生を送ったわけです。

今の日本では十六、十七歳は多感な時期にどういうことをしているか。学校の勉強で、大学受験がどうだ、学校の成績にほとんどが関心をもっている。あげくの果てにたとえば入試の出題ミスがあって、何点損した、得したとか、またある学校では世界史を勉強していないのに、自分たちは世界史を勉強して不利であるなどと言い出す。本来は逆です。世界史も日本史もいろんなカリキュラムを勉強するはずなのに学校で学べなかったのはおかしいというのが本来なのに逆転している。大学に入っても就職に有利だの、どうしたら単位がとれるかだのに汲々としている。学校を卒業して職を確保すること、これは確かに大事なことです。しかし皆さんの年齢からすると、くそくらえという話だと私は思います。どんなことでもよいので行動してほしい。

同志社は知育・徳育・体育の調和を教育理念としています。新島は知識を得るだけでは頭でっかちになり、害悪を与えて人間がおかしくなる、と言っています。倫理・道徳を身につけなければいけないし、身体も鍛えなければいけません、新島は自らを「病の間屋」と称するほど、様々な病気に苦しんでいたようです。それだけに、自分で自分の健康を管理することの重要性を知っていました。新島は鉱物の収集を趣味としていて、何日も山の中を散策しながら鉱物を集めたりしていました。自然のなかに身を置くことは心身にとってとても良いことだといろいろな人に言っています。今で言う森林浴の勧めと云ったところでしょうか。繰り返しになりますが、身体を鍛え心を養うことも大切で、頭だけの知識を増やしたってそれだけではいけないと新島は強く言っています。

皆さんも、いくらここで知育・徳育・体育・倫理だ、モラルだ、建学の精神だと言ったところで、ただ話を聞いているだけでは単に皆さんの知識が増えているだけで頭でっかちになっている。それではいけないと思います。

ところで今日、北駐車場に車を止め、こちらに来るときに「なんだ、これは」と思ったことがあります。同志社の学生も使用する駐輪場とバイク置き場があります。そこからキャンパスに歩いてくる途中で、警備員の方が立っていて交通整理をしています。その人が「おはようございます」と大きな声で挨拶をしています。それに対してどれだけの人が返事しているか。ほとんどいません。警備員さんを機械か何かとしか見ていないのでしょうか。存在すら意識していないようにも見えます。あるいは交通整理をしてお金をもらっているから、それでいいじゃないか。そんなふうにいるのかもしれない。警備員さんは人が減ってきて一人ひとりに挨拶をする。「おはようございます」。誰も何も言わずに、挨拶をする警備員さんの前を黙って通りすぎていく。何なのでしょう。それを見て、何が建学の精神、何がスピリット・ウィークだと本当にそう思いました。確かに今は町のなかで通りすぎる人びとに対して、いちいち挨拶はできません。しかし、同志社のキャンパスのなかにおいて、交通整理をしていて毎朝、顔をあわせ、挨拶をしてくださる警備員さんに対して返事をしない。皆さんに言ったところで仕方ないのですが、幼稚園の子ども以下です。

誰も挨拶をしていないのに自分だけ挨拶するのは恥ずかしいと思う人もいるかもしれませんが、何も恥ずかしがることはありません。本来、すべきことをすべく、周りの人がどうとかではなく、人がどうであれ、こうあるべきだ、こうしないといけないと思うことはするべきでしょう。ちょっとした勇気があればできることです。ぜひそういうことを実行してほしい。まあ、挨拶などは自然にできるはずのことでしょうが、ゼミの担当教員に対しても「先生」と言わずに、来週の授業から皆さんから「誰さん」と声をかける。そういうことやってみましょう。実際にしていくことが大事だと思います。いくら念仏のように建学の精神だ、良心だと言ってもそれを頭でわかっているだけでは何の意味もありません。どんな小さなことでも身近なことから何かをやってみよう。世の中のこと、社会のこと、世界のこと、人類がおかれている状況を考えてほしいと思います。何か判断してどんな小さいことでもいから行動に移してほしいです。

アメリカにいる時、ある大学のキャンパスに大きな垂れ幕が、かかっていました。私の好きな言葉です。それは「Think, Decide and Act, You have power!」ぜひ何かを始めたい。let's begin とにかく何かを始めよう、行動しよう。ニュージャパンを築いていくのは皆さん一人ひとりなのです。

二〇〇九年六月五日 同志社スピリット・ウィーク「講演」記録